

音楽と存在にみる天の闡明

著者	メドゥシェフスキー ヴァチェスラフ, 土田 定克
雑誌名	尚絅学院大学紀要
号	82
ページ	67-81
発行年	2021-12-23
URL	http://doi.org/10.24511/00000550

音楽と存在にみる天の闡明

ヴャチエスラフ・メドゥシエフスキー*

土田 定克** 訳

Heavenly Emphasis on the Music and Being

Vyacheslav Medushevsky

Translation: Sadakatsu Tsuchida

^{せんめい} 闡明とは「隠れていたものが明らかになる」という意味である。本当の美しさとは表現するものではなく、存在の奥深い中心部から出現するものである。ギリシャ語の「語源学」という単語の語幹は「真実」であるように、そもそも言葉には真実が含まれている。だが現代では、言葉の真の意味があべこべにされている。「自由」などその骨頂だ。よって早急に語意を正さなければならない。それこそ「人類の教育原理」という大事業の課題の一つである。

高尚な音楽は概して美の闡明である。美を闡明させるためには、神との協働が欠かせない。音楽はあらゆる側面で協働を避けては通れず、協働を学ぶ教科書として最適である。音楽家は「螺旋協働をどう奏で分けるか」に注意して演奏しなければならない。主も「探しなさい、求めなさい、門を叩きなさい」と戒めてわれわれに協働を呼びかけている。いかに現代がキリストを忌み嫌う時代であろうとも、いやそういう時代であればこそ、なおのこと希望をもって神の摂理に協働していかなければならないのである。

キーワード：闡明、協働、音楽、存在、教育原理

はじめに

本稿は二部構成である。まず「^{せんめい} 闡明」という概念について考究し、次にその「闡明」が音楽と存在にどのように見出されるか検証する。

第一部

I 闡明とは何か

「^{エムファシス} 闡明」(希 ἔμφασις, 露 э́мфаза, 英 emphasis) という言葉は、どちらかというとも雄弁術におけるニュアンスで捉えられ、その意味するところは「豊かな表現」(強調) だと言われてきた。なんという誤解か。危険だ。そんなふうには皮相的に捉えていると、物事を深く理解できなくなる。はたして本当の美しさと対峙するとき、それを表現したり描き出したりできようか。美と

2021年10月7日受理

*P.I.チャイコフスキー記念ロシア国立モスクワ音楽院 教授

**尚綱学院大学 総合人間科学系 芸術・スポーツ部門 教授

は、立ち現れてくるものである。まさに存在の奥深い中心部から目の前に出現してくるものである。どの民族も作り物を見て胸の高鳴りを覚えることはない。わざとらしい精神主義を説かれても人生に感動できないし、聖なる使命感で文明が栄えることもない。そもそもわれわれは存在すべくして存在しているのだ。生きているふりをするために存在しているのではない。

単語は語源まで掘り下げると物事の真髄が見えてくる。この「эмфаза」(闡明)という単語は、「фаза」(月の位相)や「феномен」(珍しい現象)と同じ語源である。いずれも「φαίνω」(現出する)という動詞から派生しており、視覚・聴覚・味覚・臭覚・触覚で捉えられるようになったもの、という意味である。このように存在論では「эмфаза」(闡明)を「隠れていたものが出現して明らかになる」という意味で捉えている。しかし雄弁術では「表現する」とか「見せかける」という意味で捉えている。どうも何かが足りない。

このように言葉の意味をたぐる語源学(ἐτυμολογία)は、もともとギリシャ人が唱道した。ギリシャ語では「語源学」という単語の語幹がἔτυμον(真実なこと)であるため、そもそも語源学とは「言葉にこめられた真実」を見極める学問なのである。

なるほど、さすがギリシャ人だ。われわれときたら卑しくも真実を木端微塵に碎き、飛び散った埃を見て「見解」「意義」「意味論」などと呼んでいる。だが埃の中に生命や真実はない、つまり「存在」はない。人類もそれと同じだ。もし美しいものに対して背を向けるのなら、万物をつないで命をたもうエネルギー源を失って埃のように浮遊してしまうだろう。

語源というものは過去をほじくるために学ぶものではない。そうではなくて、まさに将来に活かすために語源を見極め、地平線の彼方を見るべきなのだ。語意を悟って真実に満たされたとき、神の国で見えてくるものがある。全世界を意味あるものとして創造した主の目線で万物を見ているからである。

われわれは早急に襟を正して真実に向き合わなければならない。でなければ、取り返しのかないことになる。顕著な例を挙げよう。古代の自由主義者は「真実の自由」(イエス・キリスト)を拒んだ。なぜ拒んだのか。悪魔を自分の父としたからだ、とキリストは説明する(ヨハネ8:32~44)。低俗な自由を求め、真・美・愛に生きる高尚な自由を打ちやったからである。では現在はどうか。自由主義を標榜する悪魔崇拜者が^{たが}籬を外し、人々の意識を操って些細なことに目くじらを立てさせ、人と人がいがみ合うように仕向けている。そうやって万人の万人のための闘争を仕掛け、反キリストが来るための準備を整えている。だがそんなふう天上の美を打ちやって些事にかまけて何を創造できようか。神の国を預言する閃きなくしてどんな創意が湧いてこようか。自由主義という恥ずべき時代を呼びよせたのはわれわれ自身である。もし電子「収容所」で反キリストの印を押されたくなければ、存在の中心から思想形態を汲み取って一刻も早く考え方を変えなければならない。ここに、ロシアの使命がある。この世における意味の中心部だからである。

II 明るい将来性はより先なるものとして、どのように現在に備わっているのか

この質問にはアリストテレスが答えを出した。アリストテレスは自分の名前から語幹(テレス)を取って「エンテレケイア」(狙いどおりにする力)という新語を生んだ。もとより「アリストテレス」とは「最高の目的」という意味である。偉大な哲学者は「20歳の私は何者か。アリストテレスか。それともまだアリストテレスならぬ者か。もちろんアリストテレスだ。なぜならわが人生の目的(テロス)が私自身に埋め込まれており、それが私の本質をなしている

からだ」と考えた。これこそ「エンテレケイア」（狙いどおりにする力）である。文字通りに言えば、「目的指向性」である。

人間は、かつてなかった世界へ向かって歩む。与えられた神の「像」を「肖」にすべき存在、つまり「課題」（肖）をもった「実在」（像）であり、神の考えた比類なき使命で光る。この使命が人間の本質である。神が創造的に考えたことに限りはない。われわれに限界はないのだ。われわれは神の国へ入ってはじめて、神から授かった使命を全うしたことになる。シリアの聖イサアクに言わせれば、神はあらかじめ一人一人がどういう人間になるか愛の眼差しで見抜いていたという。つまりわれわれがどのような人間になるかすべて見通した上で、愛する人々のために世界を造り、「この人はここ、この人はここ」というように時空間のもっともふさわしい点に一人一人を配置し、一人一人に合った環境を与え、歴史という「人生の学校」の上でご自分の撰理を繰り広げられたのである。

おお、ならばわれわれは未来から生まれてきたということか。現在を解くカギは、未来のうちにあったのか。さよう。まさに未来に基づいて現在を紐解くという姿勢こそ、キリスト教的研究法がよりどころとする聖なる土台なのである。われわれの用いる概念はすべて、美にせよ真実にせよ未来から派生しているのである。

希望をもって創造的に未来を待ち望めば、ある程度未来も決まってくる。というのも、神の恩寵を呼び寄せるからである。希望がなければ悲観的観測にしたがって事が運んでしまう。なぜか。悪霊がそう努めているからだ。何もかも暗闇で覆おうとしているからだ。その方向に肩入れしている自由主義者もいるようだが、キリストの定義によれば彼らの父は悪魔である。悪魔はいちいち言葉尻を捕らえては鼻で笑い、いちゃもんをつけてはほくそ笑んでいる。今の時代、せめて一つでも語源を清く保ちきった概念があろうか。もはやどの概念も捻じ曲げられ、意味をあべこべにされてしまった。「自由」という概念などはその骨頂である。自由とは、そもそも神の属性である。だが悪魔はこの聖なる概念を身にまとい、美しい単語の裏に醜い鼻面を隠した。もしわれわれも同じように語意をすり替えるならば最後の審判で追及されるだろう。当然、ありのままの語意と音楽及び行動をもって、正義と真実を追求していることを証明すべきである。いまのうちに語意を修正しなければならない。これこそ私が「人類の教育原理」と名付けた、この地上における普遍的大事業の大計画の一つなのである。

そこで、第二部へ入ろう。

第二部

Ⅲ 音楽や存在から読みとれる闡明の「働き」

a) 高尚な音楽は美の闡明

「闡明」とは、真髓がはっきり現れ出てくることである。では真髓とは何か。つねに美しく、人類に感動を呼んで心を高めてくれるものである。音楽は、靈魂や文化や生命と同様に、モノではなくエネルギーである。エネルギーともあろうものがヘラヘラ汚れて罪深いものであっても良いのか。めっそうもない。エネルギーは意気を高め、天才を生み、傑作を創り出せるものでなければならない。

だが「高める」といってもどこへ向かうのか。「完全性」といってもどこに頂点があるのか。もし世の中に階調というものがあり、上方も下方もあるのならば、つまり存在するものには等

級が限りなくあるということであり、上昇する可能性もあれば退廃する可能性もあるということである。

美・真・愛こそ、その頂点にあるものだ。美とは、神の光栄の現れである。つまり創造主の完全性があますところなくにじみ出た完璧さである。被造物はただ美にひたって息を吸うことができ、美から栄養を取ることができる。かのバッハは、音楽の目的とは究極的に「神の光栄へ仕え、魂を浄化することだ」と定義した。しかもそうしようとせずに鳴り響く音楽は「悪魔の戯言か、雑音だ」とも言い添えた¹。この天才バッハの定義を、人類の教育原理のどの分野にも広めなければならない。

自力だけでは目に見えない世界もふくむ「存在」の奇跡性にこぎつくことができない。そこで恐れ多いことに、創造主はわれわれに協働しないかと手を差し伸べてくださっている。「協働」という言葉は、使徒パウロがクリスチャンのことを「συνεργοί」（協働者）、つまり神の傍にいる同労者と呼んだことに始まる（コリント前3:9等、参照）。

神と協働することによって、顕されるものが顕す者のうちに出現し、闡明が実現する。つまり聖人の奇跡に、芸術家の傑作に、学者の発見に、「顕わされるもの」すなわち目に見えない創造力や神の美が現れて、見えるかたちとなる。さらに人生の織りなす抑揚や国民の偉業にも現れて、見えるかたちとなる。

高尚な音楽は、概して美の闡明である。まさに天からくる創造力と協働し、人の心を存在の高みへ導く芸術である。しかも闡明を起こすコツや法則や技能もあるし、その技能を身につけるための学習法もある。もちろん闡明学という学問もある。そこでは人類の教育原理の奥義を調べ上げて研究を重ねている。

私などはそれらを駆使して演奏家を育てている。音楽はどの面でも協働を避けては通れない。どの面でも神とのふれあいを学ぶ場であり、神とふれあえばこそ美が流れ出てくるからである。協働のないところには生気がない。ふだん学生と一緒に天才演奏家の極意を分析しているが、その授業テーマはどのテーマも神とのふれあいを学ぶ教科書になり得る。たとえば「拍」。拍の理論を現場に移せばメトロノームの理論となる。だが生きた拍とは協働の幸福感に溢れるものであり、われわれが土台から舞い上がって神聖なエネルギーが掬い取ってくれる感覚である。「和声」もまた神とのふれあいをうながす会話のやりとりである。そう、あるとき中国人の女子学生が助言を求めてきた。この音楽は何が何だかさっぱり意味がわかりませんと言う。ベートーヴェンの15の変奏曲「エロイカ変奏曲」のバス主題。弾いてもらったら、たしかに何もわかっていない。そこで次のように教えた。

何を言うのです。よく耳をすませてごらん下さい。よく聴くと、この「T-D」と「D-T」は会話のやりとりになっていませんか。なんとという妙技でしょう。神様に惹かれて「T-D」で天上へ飛んでいるのです。すると天から根源力があなたを支えにきてくれているのです

¹ 1738年、J.S.バッハ（53歳）はライプツィヒの聖トマス教会でリハーサルしていた弟子に次のように伴奏の原則を説明した。「音楽を支えているのは通奏低音です。ですから両手で通奏低音を弾くときは、左手で譜面通りに弾き、右手でその音に協和したり協和しなかったりする音を織り交ぜながら、和声美しく神の光栄に仕えて心を癒すように奏でなければなりません。神の光栄と魂の浄化こそ通奏低音の究極の目的にして、音楽の究極の目的ですよ。この点を肝に銘じていない演奏は真の音楽ではなく、悪魔の戯言か雑音に過ぎません」（Швейцер А. Иоганн Себастьян Бах. М., 2002. С. 119-120 [A. シュヴァイツァー『ヨハン・セバスチアン・バッハ』モスクワ、2002年、119～120頁]）。

(D-T)。見事な組み合わせでしょう。いくら味わったって味わいきれませんよ。パガニーニもこの組み合わせでもって（ただし装飾音型で強めています）有名な奇想曲第24番の主題を書きましたね。そしてその主題を用いてラフマニノフも「パガニーニの主題による狂詩曲」を書き上げたわけですが、この名曲の織りなす天地の協働ときたら30分も私たちの耳をとらえて離しません。さらにブラームスもこの主題の魅力をぐっと引き立てて変奏曲を書きましたね。もとはといえばバッハがよくフーガの開始部で、これと同じ会話のやりとりを書き残しているのです。たとえば「平均律」第一巻の変ホ短調のフーガでは、主要動機の冒頭音型がこのベートーヴェンの主題と同じでしょう。まさに「Es-B」と「B-Es」（←異声部の応答）となっているではありませんか……。

このように、協働は音楽のあらゆる面に潜んでいる。協働こそ、音楽の統語関係（A音型とB音型が接続する意味）や形式、さらに、演奏中にうまくもっていくときの奇跡的現象を解き明かすカギなのである。

b) 闡明をなしとげる協働（音楽にみる円協働と螺旋協働）

人が神と協働することは、福音書の戒めである。まさに「探しなさい、そうすれば見つかる」（マタイ7:7）である。主は自発的になっても良いですよと言っているのではない。むしろ探しなさいと命じ、「もっと自発的になれ」とわれわれを鼓舞しているのだ。これが戒めである。しかしいったい何を探したらよいのだろうか。そう、まさに神の国を探し、美を探求し、神の光栄を探しなさいという（マタイ6:33参照）。神は無理やり押し付けてくることはしない。むしろ無理やり押し付けてくるのは悪魔である。現にズンチャン、ズンチャン、ズンチャンとトンカチで脳ミソを打ち付けてくる。神様はトンカチで打ち付けることはしない。ただ芳香で呼びよせて待っておられる。ひとえに愛してくださっているからである。え、「いっそ人々を強制して、無理やり神を愛させてみたらどうですか」ですと。とんでもない、そもそも愛とは能動的な善意である。棍棒でもって愛を呼び起こすことなどできない。だからこそ創造主は一切強いることなく、われわれが自発的に行動を起こすのを待っておられるのだ。「ならば、いっそ神がいることを証明してみたらどうですか」ですと。いや、そうは問屋が卸さない。神がご自分を隠しておられるのは、まさにわれわれが自主的に探すためではないか。たとえあなたが神から遠いところにいたとしても、かすかな望みをもって「信じてみたいものだ」と溜息ひとつ吐いただけで、神はこれまでご自分を拒んでいた空っぽの心を開き、温かい恩寵の風を吹きこんでご自分の方へ向かう道を示してくださるだろう。「でも、どうも言っている意味が分かりません」ですと。大丈夫、明らかに分かるようになる。ぜひとも「求めよ」うではないか。「そうすれば与えられる」のだから。

さらに主は「門を叩きなさい、そうすれば開かれる」と戒めておられる。これも上記二点の協働のかたちと同じく、天と地のやり取りを示している。だが、主はなぜあえて別の言い方をされたのか。門を叩いたらいったい何が開かれるというのか。しかしそのような高度な事柄を問う前に、まずは「門」まで近づいてみるのが先決だ。

音楽は協働をまなぶ教科書として最適である。なにせ聴いていて心地良い。オプチナの克肖者ワルソノフィに言わせれば、人は音楽をとおして霊的な事柄を聴き入ることを学ぶという。実際に私が授業で協働について教えるときには、概念を二つ用いて分かりやすくし

ている。「円協働」及び「螺旋協働」である。円協働とは、拍の形に似ている。低音→和音→和音（ワルツの伴奏形）等々。この円はわれわれの自発的エネルギーと、上から掬い取りにくるエネルギーによって構成されている。いっぽう螺旋協働は、演奏中のもっていき方に似ている。そのように螺旋協働でもっていかれると、霊魂が神へむかってより近くへ導かれてゆく。

つまり神に近づけば近づくほど自発的エネルギーも変容し、天から掬い取りにくるエネルギーも変容するというわけなのだが、聖書はこの双方に生じる変容を「力から力へ」（詩編84：8）や「恩寵の上に恩寵を」（ヨハネ1：16）という言い回しで表現している。

してみれば「われわれの」自発的エネルギーも変化を蒙った以上、呼び名も変えるべきではなかろうか。もちろん自発的エネルギーがわれわれのエネルギーであり続けることは変わらない。いままでどおり上へ向かおうとする意志から流れ出てくる。しかし、いまやそこへ神への親近感が溶けこんで、異なるエネルギーに変容した。当然、新しい呼び名が必要だ。これを「勇氣エネルギー」と呼ぶことにしよう。もちろん自信満々な勇氣ではなく（そんなのは太々しいだけである）、ひとえに神の愛と憐みを信じきる勇氣である。「勇氣を出しなさい」（ヨハネ16：33）と、キリストもご自分の教会を励ましている。

この勇氣、まさに神との親近感からくる勇氣に答えて、天のエネルギーも変容するのだ。主ご自身も人と神とのこのようなやり取りを示して「わたしは門である。わたしを通して入る者は救われる。その人は、門を出入りして牧草を見つける」（ヨハネ10：9）と言っている。「牧草」とは神の国のエネルギー、つまり聖霊の息吹に他ならない。

勇氣ある「叩き」と「牧草」の闡明を示す音楽の事例が必要だろうか。ベートーヴェンのピアノソナタ第7番、第二楽章の主題の頂点がその「叩き」である（譜例1：a）。では天の応

譜例1 ベートーヴェン ピアノソナタ第7番 第二楽章冒頭

Largo e mesto.

答はどこか。カデンツで響く「I²」の和音がそれである（譜例1：b）。このカデンツは単にフレーズの終わりではなく、こうして魂が神とふれあって浄化した奇跡の響きである。これぞ、みずみずしい「牧草」、つまり感謝と恩寵で軽やかになった自由の「牧草」である。現に、低音の音型が聖神（聖霊）の喜びを現しているのではないか（譜例1：c）。それまでしかめ面で背負ってきた重苦しさを忘れて、歌うことができているのではないか。

この「牧草」を見つけた後はどうなってゆくのだろうか。円協働が広がってゆく。こうして勇気エネルギーは上り詰め、滝のような下行音型で副主題を締めくくっている（譜例2：d）。

譜例2 ベートーヴェン ピアノソナタ第7番 第二楽章 第15～21小節目

The image shows a musical score for two systems. The first system consists of a treble clef staff and a bass clef staff. The treble staff begins with a 'cresc.' marking and contains several measures with notes and rests. The bass staff has a 'f' marking. The second system also has two staves. The treble staff has a 'c' marking above it. The bass staff has 'f' and 'p' markings. The score includes various musical notations such as slurs, accents, and dynamic markings.

では応答はどこか。新しい「牧草」の上で、前小節と同じ音型が天の慈愛をたっぷり受けて、さながら「天の伴奏」を受けてメリスマ旋法で歌っているのが分かる（譜例2：e）。

「何だと、天がわれわれの伴奏をしているだと。そんなバカなこと、あり得るか」。しかし、現実にそれがあり得ているのではないか。まさに「人の子は仕えられるためではなく仕えるために（中略）来たのである」（マルコ10：45）。そしてわれわれに聖神という慰むる者を送ってくださったのである……。こうして、われわれの靈魂は測りがたい神の慈憐を受けて傷感状態に入る。あらゆる人知を超えた神の平安（フィリピ4：7）。「音楽は、あらゆる知恵や哲学よりも高度な啓示である」と言ったベートーヴェンは、決してホラを吹いたのではない。ただ観たことを証言しただけである。

展開部は奇跡から始まってゆく（譜例3）。勝利の歓喜、ありとあらゆる存在への堂々たる讃歌……。おお、学生と共に天才の演奏に耳を傾けながら協働の理論を一音一音探求していると、なんと不思議なほど学べることが多いか。われわれは闡明の証人となる。まさに目に見えない力と美しさが、傑作を奏でる天才的演奏のうちに出現するのを見届けるのである。

音楽家のために、いま述べた螺旋協働の重要性を確認しておこう。曲を演奏するときその音楽の勢いをうまくもっていく秘訣は、この螺旋協働をどう奏で分けるかに掛かっているの

譜例3 ベートーヴェン ピアノソナタ第7番 第二楽章 第30～37小節目

だ。キリストは異なる協働の動作をたった一文で言いつくした。探しなさい、求めなさい、叩きなさい、である（マタイ7：7）。どの動作も一緒である。しかし音楽家ならばこれらのエネルギーの階調を見極めて、うまく奏で分けなければならない。演奏に階調があればこそ、聴衆は協働力で持っていられるさまを実体験して引き込まれるからである。この道はいくら進んでも限界がない。祈りにも、啓示にも、人生という奇跡にも、限界がないのと同じである。「信じる者には次のようなしるしが伴う。彼らはわたしの名によって悪霊を追い出し、新しい言葉を語る。手で蛇をもつかみ、また、毒を飲んでも決して害を受けず、病人に手を置けば治る」（マルコ16：17～18）と書いてあるとおりである。

結論

かくして闡明の意味と協働法を論じつめれば、「人類の教育原理はどうあるべきか」という問題にたどり着く。これぞ、この地上における普遍的大事業だからである。われわれは学校教育に携わるとき、協働の三段階（探す、求める、叩く）に沿って子供たちを教導すべきではなかろうか。音楽に見られるように人々が「力から力へ」「恩寵の上に恩寵を」受けられるような啓蒙体系を、大衆媒体の中に打ち立てるべきではなかろうか。目下、悪魔の方が熱心だ。マスメディアを利用して地獄の火へ落とす下行階段を敷き、好き勝手に生きたくなる強烈な要因をばらまき、身を焦がすサタンのエネルギーで埋め尽くしている。

もし国民が美しく生きられなくなって心がすさんでしまったら、やることなすことどれも地獄絵と化してしまうだろう。欧米に媚びて反ロシアの方向に進むならば袋小路に入る。ロシア人は古来より何かにつけ「意味」「善」「公平性」「良心」「正義の実行」「美の創造」といった用語を用いて考究してきたではないか。こういう言葉が、古臭く思えてしまうようになってはいけない。こういう言葉に「狙いどおりにする力」があり、われわれの生活と力があり、総体性（ソボルノスチ）の基盤があるのだ。欧米がいかなる陰謀を企もうとも、ロシアはただ神の正義に拠って立つ。もしわれわれが神の正義に拠って立ち、神に頑なに逆らわず心を開いていれば、ロシア自体が闡明し、見えない神の奥義を見えるかたちにすることができるだろう。偉大な奇跡者かつ予見者であった上海及びサンフランシスコの主教聖イオアンは、ロシアのすすむ道を「新しい聖なる歴史」と呼んだ。これぞ、朽ちることのない指針である。欧米としてもロシアに歯ざりする権利はない。だいたい欧米は一度もロシアを愛さずロシアに惹かれたことはなかった。それに対してロシアは、むしろ西欧を愛し西欧に惹かれ、優れたものはすべて

西欧から受容したのである。それでも西欧由来の唯名論・デカルト哲学・合理主義・法律主義ほか数えきれないほどある「〇〇主義」を拒んだことや、最近のぞっとする自由主義の潮流に従わなかったこと、そして物理的な攻撃²に屈してこなかったことは欧米のためにも救いとなるであろう。

近々、拙著『人類の教育原理』が出版される。ぜひ注意を払っていただきたい。われわれの課題は、創造主の摂理と愛に応えることだ。現代は黙示録の時代に入ったかのようにキリストを忌み嫌う風潮があるが、だからといって二の足を踏むこともあるまい。むしろその逆である。こうしてキリストの再臨が近づいているという状況こそ、現代人を勇気づけ、時代に花を添えている。地獄の門もわれわれに勝つことはできない。もしわれわれが「神の摂理に協働する」という戒めを破ることさえしなければ――。

引用文献

Швейцер А. Иоганн Себастьян Бах. М., 2002.

訳者あとがき

本稿はロシアの誇るモスクワ音楽院の碩学・メドゥシェフスキー教授（1939年～）が、2021年5月にモスクワで開催された第29回国際教育研究報告会「アレクサンドル・ネフスキー。西洋と東洋－民族が受け継いできた記憶」にて口頭発表したものを若干修正して論文にしたものである。

今年82歳になられたメドゥシェフスキー教授（現役。ロシアの教授には定年なし）は本稿にて警鐘を鳴らしている。もしわれわれが天上の美に背を向けて世俗の自由を謳歌するならば、それが人類の致命傷となるという。押さえておきたいのは、そもそも自由には次元の異なる三種類の自由があるという点である。よく言われる「社会的自由」（権利）や「形而上的自由」（善悪の判断）のほかに、われわれには「精神的自由」（愆からの解放）がある。救い主は「罪を犯す者はだれでも罪の奴隷である」（ヨハネ8：34）と明言し、「（わたしの）真実はあなたたちを自由にする」（8：32）と述べた。つまり主は人々を（見えると見えざる）罪への奴隷状態から解放し、真の「精神的自由」を与えて魂を永遠の命へ導くために世に来たのである。この史実に基づき、メドゥシェフスキー教授は「キリストの教えに逆らう教えは、神に逆らう教えだ」という道理を展開する。社会的自由ばかり最優先するならば、聖書にある神の法を犯すことになる。神の法を犯すなら、ソドムとゴモラを見るまでもなく神の怒りを受けることになる。芸術家が「真実の美」を体現したキリストに逆らって自由奔放に表現するならば、その創作活

² 訳注。訳者の質問に対し、筆者は以下のように答えている。「歴史上のハイブリッド戦争を意味する。スコラ学やそれにつづく唯名論の時代（11～16世紀）、カトリックはキリストの「杯の戒め」（「皆これを飲め」マタイ26：27）を拒んだ。戒めを拒んで考え方がダメージを受けないわけがあるうか。心が正教の清さを忌まわしく思わずにいられようか。この点からハイブリッド戦争という理念が生じたのである。この理念で行動が決まり、イデオロギーと軍事力で世界を制覇したいという欲求が生じた。北方十字軍やスウェーデン十字軍をふくむ一連の十字軍がしかり、二つの世界大戦がしかりである（1600年以降、イギリスの秘密情報部（MI6）がこの任務に当たっている）。このような東側の見解は多文化理解という観点からも興味深い。『閉ざされた言語空間』（江藤淳著。文春文庫、2010）を開く何かがある。

動に「真実の美」が闡明することはない。

メドゥシェフスキー教授は 2002 年 9 月に来日されて第 2 回秋吉台音楽ゼミナールにて講義されたこともあり、私が学生時代から大変お世話になっている恩師である。お知り合いになってから 26 年の間、年々成長しつづけるお姿を目の当たりにして驚嘆してきた。たとえば本稿では「神の国で見えてくるもの」(68 頁)「神の国へ入ってはじめて」(69 頁)という表現があるが、この「神の国」とは「来世の神の国」だけでなく「現時点で人の内にある神の国」(ルカ 17:21)も意味している。そのように、論文全体が音楽を介した福音解説となっている点も興味深い。本稿は教授の膨大な著作群のごく一部でしかないが、意味を絞りきった短文の連続で教授の世界観の要点が簡潔にまとめられた傑作である(ちなみに本稿の結尾で教授自身が紹介した最新ご著書『人類の教育原理』は、2021 年 7 月にモスクワで第 1 巻が出版された。全 6 巻となる予定)。

私自身からすれば、拙論「音楽の創造力の探求—ラフマニノフの『悲哀』にみる演奏の奥義—」(尚綱学院大学紀要第 76 号所収)で知力が及ばず論じ切れなかった事柄が、「闡明」という語句を用いて見事に論説された貴重な論考である。あの拙論及び前回発表したガリマ・ルキナ著「ロシア音楽のロゴスへの道」(同第 81 号所収)と本稿とを読むと、まるで三部作のように論拠が次第に明らかになっていく構成となった。さらに次号投稿予定の拙論「祈りとしての演奏芸術」(仮題)に欠かせない前提知識も、本稿にはふんだんに盛り込まれている。本稿で用いた「闡明」(広辞苑：はっきりしていなかった道理や意義を明らかにすること)という訳語は、ハンスリックの『音楽美論』に出てくる「音楽に於ける美の闡明」や「音楽の哲学的闡明」から拝借した(ハンスリック著/田村寛貞訳『音楽美論』一穂社、2005 年、17 頁、86 頁)。

こうして二人の教授の翻訳を手がけているうちに、「存在論」(онтология)や「存在」(бытие)という単語をただ直訳しては和文に馴染まないことに気づいた。前号の「ロシア音楽のロゴスへの道」の最初に出てくるメドゥシェフスキー教授の音楽の定義も、今であれば「音楽とは、ありとあらゆるものを描き出し、とくに精神をあらわす言語」とでも訳し上げたいところである。³ 難解な哲学用語「エンテレケイア」も、前号では「向かうべき目的をもった生命力」と訳していたが、本稿では絞りに絞って「狙いどおりにする力」と訳した。なにせ言葉が日本語として生きていなければ、授業などで他人に伝える際にどうしてもつまづくからである。

演奏とは実に神秘的な芸術行為であり、打鍵ひとつ取っても物理学では解明できない。なぜ同じ楽器を弾いているのに、弾く人によってこうも音色が異なるのか。この点、メドゥシェフスキー教授の補足説明(2021 年 8 月 3 日のメール)が参考になるため和訳しておく。

ピアニストのタッチを見てください。その神聖なタッチは螺旋協働における垂直力の良い例で、見事なタッチは私たちをじかに天に近づけてくれます。手を正しく構えるのは当然です。でも、それだけじゃ何かが足りない。天からの音を聴き取ろうとする耳がなければ、どんなにタッチを工夫したって魅力的には響きません。これは声楽家の発声や管弦楽器の

³ 当時は「音楽とはまさに、存在論〔思考の源〕の言語として、実在するあらゆる次元のものを描き出し、おもに精神生活について語っている言語」と訳した(尚綱学院大学紀要第 81 号 46 頁参照)。ちなみに修正に際し、著者本人に真意を問い質した。

音色と同じく霊的範疇の問題です。いくら物理学で解明しようとしてもどだい無理な話で、形而上学で見極めなければ解明できない問題なのです。だって、だれ一人として倍音を押し広げたりすることなんてできないでしょう。でも精神はそれを可能とするのです。めいっぱい広がった倍音（あたかも高調波の出現）により、歌手からではなく、まるで歌手を通して天上から声が鳴り響いているように聴こえてくるものなのです。

単に具体的な音だけではありませんよ。詩にせよ、絵画にせよ、公私を問わず人の生き方でも、協働状態を見抜くことができます。ズナメニイ聖歌は天の高みで協働状態を維持している良き例ですよ。人と会ったときにも相手の内面に天の光がどれくらいあるか瞬間的に見抜きます。なんとなく倦怠や不満があつて天から離れた重苦しい精神状態も見抜きますし、その逆に、天に近い心の状態も見抜くものです。⁴

最後に、翻訳に協力してくれたアレクセイ・ポタポフ氏とアンドレイ・アフォニン氏に心からの謝意を表したい。なお、前回の投稿時に「原文と照合したい」という声があつたため原文も掲載しておく。

В.В.Медушевский

Небесная эмфаза в музыке и бытии⁵

В моем выступлении две части. В первой обсудим понятие эмфазы. Во второй — ее проявления в музыке и бытии.

Что есть эмфаза? Чаше ее понимали риторически, как выразительность. Неправильно! Опасно! Поверхностное понимание перекроет доступ к глубине. Красота сущего — разве выражается, изображается? Она является! Является в реальность из сокровенной сердцевины бытия. Показухой не поднять народы к вершинам, вывертами психизмов не претворить жизнь в восторг, не возжечь священным огнем цивилизации. В бытии мы призваны быть, а не принимать вид живых!

К онтологической глубине зовет этимология слова: «эмфаза» родственна «фазе», «феномену». Они от глагола *файно* «являться», становиться доступным зрению, слуху, вкусу, обонянию, осязанию. Являться из сокровитости в очевидность — это онтологическое представление.

⁴ メール原文は以下の通り。Божественное туше у пианистов — пример такой вертикальной силы, напрямую соединяющей нас с Небом. Правильная постановка руки необходима, но недостаточна. Тайна обаяния туше открывается только при взгляде слуха с Неба. Туше — духовная категория. Равно как и звуки певческого голоса или струнных и духовых инструментов. Они к физике тоже не сводятся, требуют метафизики. Никто не может раздвигать обертоны по высоте. А дух может. При широкой растяжке обертонов (явление квазигармоник) слушателям кажется, что звук исходит не из певца, а проходит через него свыше. Не только конкретный звук, но и общий тон стихотворения, картины, бытия людей, индивидуального или даже эпохального стиля — тоже примеры синергии состояния. Знаменный распев держится в небесной высоте синергией состояния. И людей мы мгновенно распознаем по уровню небесного света внутри. А бывают люди унылые, тяжелые по причине скрытого уныния, недовольства или иных видов самоотлученности от Неба.

⁵ Выступление на XXIX Международных образовательных чтениях «Александр Невский: Запад и Восток, историческая память народа». Москва, май 2021 года.

Выражаться, выказываться — риторическая трактовка. Она недостаточна.

Этимологию открыли греки. Этимон — истина. Этимология — учение об истине, скрытой в слове.

Вот это да! Мы-то, бедные, перемальываем истину в пыль мнений, значений, семантики. В пыли бытия нет. Человечество — пыль вне жизнетворящих, всесвязующих энергий красоты.

Этимология не о прошлом. В нее должно погружаться ради будущего — дабы смотреть за горизонты. В полноте этимоны раскроются в Царствии Божиим, когда все увидим глазами Творца мира и смыслов.

Настраиваться на истину надо срочно. Иначе плохо будет. Вот, не захотели древние либералисты принять истину свободы. Христос объяснил, почему именно: потому что отцом своим сделали дьявола (Ин 8:44)! А теперь дьявольский либерализм распоясался, крушит планету, развинчивает сознание на атомы, стравливая всех друг с другом, готовя приход антихриста. Без небесной красоты, пророческого проблеска Царствия, ничего достойного не сотворить. Позорную эпоху либерализма призвали сами. Если не хотим печатей антихриста в его электронном концлагере, срочно переменим образ мыслей, черпая их из сердцевины бытия. В том миссия России, смыслового центра мира.

Каким способом светлая будущность скрыта в настоящем?

На этот вопрос ответил Аристотель — неологизмом «энтелехия», который вывел из своего имени. «Аристотель» — благой конец. А кто я в 20 лет — Аристотель или не Аристотель? Аристотель! Ибо цель моей жизни вложена в меня как моя сущность. Это и есть энтелехия, буквально — «вцеленность».

Человек, призванный к небывалому, есть единство образа и подобия, данности и заданности. Его призвание, светлейшая неповторимая мысль Божия о нем, — и есть его сущность. Творческая мысль Бога беспредельна. Нет у нас предела! Венец раскрытости — в Царствии Божиим. По Исааку Сирину, Бог любовью увидел каждого из нас. Ради любимых сотворил мир, разместив каждого в историческом времени и в пространстве Земли, дав каждому обстоятельства, простерев Промысл Свой над историей — школой жизни.

О! мы родом из будущего? Будущее — ключ к настоящему? Да, таково священное основание христианской методологии! И красота, и истина, и все понятия наши — тоже из будущего.

Надежда, творческое ожидание грядущего, в определенной мере формирует его, ибо привлекает благодать Божию. Безнадежность ведет к сбыванию мрачнейших прогнозов. Почему так? — Бесы стараются. Все окружают мраком. Их агенты на земле — либералисты, чей отец, по определению Христа, — дьявол. Поиздеваться, поглумиться над каждым словом — злая радость для него. Осталось ли хоть одно понятие в исходной чистоте? Все извращено, вывернуто наизнанку, начиная с понятия свободы. Свобода — Божья. А дьявол нацепил святое понятие на себя, рыло свое скрыв за благовидным словом. За живой язык дадим ответ. Естественный язык вместе с музыкой и языком жизненных поступков призван стать свидетелем нашего стремления к правде и истине. Исправление языка — одно из центральных направлений того великого, единого общего дела на земле, которое я называю фундаментальной педагогикой человечества.

Переходим ко второй части.

Как э́мфаза «работает» в музыке и бытии?

Э́мфаза — выявление главного. Главное — красота, сила восторга, способного поднимать человечество высь. Музыка, как и душа, и культура, и жизнь — не вещь, а энергия. Какая она — хилая, грязная, преступная? Должна быть жизнеподъемной, способной рождать гениев, творить шедевры!

Подъем — это куда? Совершенство — где верх? Если есть градации, есть верх и низ, значит, есть беспредельная шкала бытия, есть возможность восхождений и дегенерации.

Место красоты, истины, любви — на вершине! Красота — явление славы Божией: всесовершенства всех совершенств Творца. Только ею и может дышать и питаться творение. Бах дал определение последней цели музыки: «служение славе Божией и освежение духа». А без того, добавил гений, пред нами «не музыка, а шум и дьявольская болтовня». Баховскую дефиницию музыки следует распространить на все стороны фундаментальной педагогики человечества.

К чудесности бытия своей силой не продаться. Творец предлагает нам дивный путь **синергии**. Слово идет от апостола Павла, назвавшего христиан синергами, то есть соработниками у Бога.

Через синергию осуществляется э́мфаза как явление являемого в являющем: являемое, невидимая творческая сила и красота Божия становится видимой в чудесах святых, в шедеврах искусства, в открытиях ученых, в цельной интонации жизни, в подвиге народном.

Высокая музыка в целом — э́мфаза красоты, обучающая сердца человеческие высоте бытия в соработничестве с творящими энергиями свыше. А есть еще и приемы, есть законы, есть искусство э́мфазы, есть способы обучения этому искусству. Соответственно есть и наука э́мфазы, составляющая тайну фундаментальной педагогики человечества.

Таким способом я обучаю исполнителей. Какую бы сторону музыки ни взять — все есть синергия. Все есть училище богообщения, откуда льется красота. Без синергии мертвечина. Мы со студентами анализируем тайны гениальных исполнителей. Любая тема курса анализа становится учебником богообщения. Метр. Его теория на деле — теория метронома. А живой метр — в блаженстве синергии, наших взмываний от опор и подхватов божественных энергий. Гармония — тоже диалог богообщения. Попросила меня о помощи китайская студентка. Говорит: я ничего не понимаю в этой музыке. Басовая тема 15 вариаций Бетховена. Сыграла — действительно не понимает. — Ну что Вы! — посмотрите как прекрасно: T-D: D-T! Возлет к Небесам на боголюбивой доминанте. А с Неба утвердительная сила бытия. Эта пара прекрасна, ею можно наслаждаться без конца. Она же, только с подкреплением группетообразных фигурок. — в теме 24 этюда Паганини. В Рапсодии Рахманинова на тему Паганини мы радуемся синергии Неба и земли целых полчаса. И Брамс не прошел мимо чудной темы. Тот же диалог — в типичных зачинах фуг. В фуге *es moll* Баха — те же ключевые начальные звуки, что и у Бетховена: Es-B:V-Es (в ответе другого голоса). И так во всех средствах музыки. Здесь ключ к синтаксису, к форме, к феномену развития...

Синергия заповедана. Ищите — и обрящете. Инициатива не просто возможна. К ней побуждает нас Творец: ищите! Это заповедь. Чего искать? Ищите Царствия, красоты, славы Божией. Насильно ничего не будет навязано. Это дьявол насильник: бум-бум-бум — по мозгам молотком. Бог молотком не бьет — зовет благоуханьями и ждет, потому что Он любовь. Можно ли силой

заставить людей любить Бога? О нет, любовь доброхотна, из-под палки не рождается. Потому-то Творец ждет нашей инициативы, ничего не навязывая. — А докажите, что Бог есть! — Не пойдет. Для того-то и скрывает Бог себя, чтобы мы искали! Но лишь вздохнем надеждой доверия — тут же откроет Бог нашу былую пустоту без Себя, кроткими веяниями благодати подсказав путь к Себе. Недоумеваем? — обречем ясность. Попросим — дастся.

Еще заповедано: Толците, стучите — и отворят! Тот же диалог земли и Неба. Но зачем другие слова? Что отворят? Однако прежде надо подойти к дверям.

Музыка — сладчайший учебник синергии. По слову прп. Варсонофия Оптинского, музыка учит духовным восприятиям. В курсе анализа я использую два понятия: круг синергии и спираль синергии. Круг подобен такту. Бас-аккорд-аккорд (вальсовая формула аккомпанемента)... Он организован синергией нашей инициальной энергии и подхватывающей энергии свыше. Спираль подобна развитию. Развитие подводит нас к новому уровню близости души к Богу.

В сближении преображаются вместе и наша инициальная энергия, и подхватывающая Небесная энергия. В Писании это взаимное преобразование фиксируется в понятиях «от силы в силу» и «благодать возблагодать».

Что произошло с «нашей» инициальной энергией, требующей теперь нового имени? Она наша: по-прежнему льется из нашей, обращенной ввысь воли. Но теперь в ней растворена божественная близость. Оттого-то и стала она иной. Соответственно требует нового имени. Я называю ее энергией дерзновения — в уповании не на себя (то было б дерзостью), а на любовь и милость Божию. «Дерзай, дочь!» — говорит Христос Церкви Своей.

Соответственно дерзновению, которое от близости Божией, преобразуется и отвечающая небесная энергия. Заповедь говорит об этом так: и войдете и выйдете, и пажить обрящете. Пажить — энергии Царствия Божия, веяния Духа Святого.

Нужен музыкальный пример дерзновенного «стучания» и явления пажити? Кульминация главной партии *Largo e mesto* Седьмой сонаты Бетховена. А ответ свыше, — на небесной гармонии кадансового квартсекстаккорда. Вторгающаяся каденция — не точка, а чудо обновления души в рамках единого процесса богообщения. Вот она, пажить свежести, свободы, благодарной и благодатной легкости... Фигурации в басу — радость Духа Святого. Можно петь, забыв о былой тягучей тесноте!

Что дальше? Круги синергии разрастаются. Высшее дерзновение — в заключительных каскадах побочной партии. А ответ? Новая пажить. Снова фигурации, но уже мелодизированные — от обилия небесной любви и милости. Небо аккомпанирует нам? Невообразимо! Как это? А так. «Сын Человеческий пришел не для того, чтобы Ему служили, но чтобы послужить». И нам послал Утешителя Духа... Душа же наша входит в состояние умиления от непостижимой милости Божией. Мир Божий, превысивший всякого ума. «Музыка есть откровение, более высокое, чем мудрость и философия». Бетховен не был пустословом и говорил то, чему был свидетелем.

Разработка начинается с чуда: победная радость, торжественный гимн бытию... О, как интересно, как поучительно, нотка за ноткой, проследивать со студентами логику синергии в игре гениальных исполнителей! Мы становимся свидетелями эмфазы — явления невидимой силы и красоты в видимых шедеврах композиции и гениального исполнения.

Зафиксируем для музыкантов важность сказанного о синергичных спиралах. В них тайна музыкального развития. Христос охватывает в одной фразе разные проявления синергии: ищите, просите, стучите. Они едины. Но музыкантам нужно различать и выстраивать градации энергетических уровней. От них увлекательность такой правды и красота развития, что невозможно оторвать слух. Пределов же возрастания нет, как нет предела и молитве, откровениям и чудесам жизни. «Уверовавших же будут сопровождать сии знамения: именем Моим будут изгонять бесов; будут говорить новыми языками; будут брать змей; и если что смертоносное выпьют, не повредит им; возложат руки на больных, и они будут здоровы».

В заключение — последний шаг в раскрытии смысла эмфазы и закона синергии: выход на уровень Фундаментальной педагогики человечества, как единого общего дела человечества на земле. Не так ли, по ступеням синергии, нужно вести детей в школьном воспитании? Не так ли, как и в музыке, — «от силы в силу» и «благодать возблагодать» — выстраивать систему просвещения людей в СМИ? Сейчас больше усердствует дьявол, прокладывая в них лестницу, низводящую в геенну огненную, сгущение отрицательного бытия, самосжигательных сатанинских энергий.

Если народ, утратив способность красоты, ожесточится, то, что бы он ни строил, — построит ад. Желание в угоду Западу стать анти-Россией — тупик. Исконные наши слова — смысл, добро, справедливость, совесть, творение правды и красоты. Не должны они казаться старомодными. В них энтелехия, в них жизнь и сила наша, основа нашей соборности. Сколько б интриг ни плел Запад, Россия выстоит одной лишь правдой Божией. Когда так, когда не упорствуем в противлении Богу, но открываемся Ему, то и сама Россия становится эмфазой, явлением Сокровенного в зримом. Великий чудотворец и прозорливец, святитель Иоанн Шанхайский и Сан-Францисский, путь России назвал Новой священной историей, и это ориентир навсегда. А Запад не вправе обижаться на Россию. Никогда Запад не любил, никогда не тянулся к России так, как она к нему. Все лучшее брала от него. Но то, что она противилась номинализму, картезианству, рационализму, юридизму, бесчисленности прочих -измов, новейшей жути дьявольского либерализма, да и физическим наскокам, — ему же и во спасение.

В скором времени выйдет моя книжечка о Фундаментальной педагогике человечества. Обратите на нее внимание. Наша задача — ответить Творцу и Промыслителю. Апокалиптическое христоненавистническое время, стыдливо названное Новейшим, — не помеха. Наоборот. Величие эпохе придает близящееся второе пришествие Христа. Врата ада не одолеют нас, если мы не изменим заповеди соработничества Промыслу Божию!